

## 日本労働年鑑 第24集 1952年版

The Labour Year Book of Japan 1952

## 第一部 労働者状態

## 第六編 農家の状態と農民の生活

## 第一章 農家

## 第二節 農家の経営条件

経営土地面積 耕地その他農家の経営する一切の土地面積は、第159表「経営土地面積」によれば、一、〇二一萬町歩であり、その内耕地面積は五〇九萬町歩(四九・八%)、耕地をふくむ農用地は六二四萬町歩(六一・一%)となっている。耕地面積は一九四七年と比較して田畑ともに約八萬町歩を増加している。また貸付地をもつ農家数は一四五萬戸で、総農家の約二五%が貸付地をもち、その面積は四八萬町歩である。結局総農家の四分の一が一戸当たり平均四反歩の貸付地を有するわけである。貸付耕地は一九四七年において一一五萬町歩であったが、本年度は四二萬町歩に減じている。

なお農用地を土地利用上の種類別に見ると、田では一毛作が六五・一%、二毛作以上のものが三三・六%、その他一・二%であり、畑のうち普通畑は九四・八%、牧草地二・七%その他となっている。樹園地その他の農用地についてはそれぞれの表について見られたい。

二、畜力および機械力 畜力と機械力を使用した農家と使用しない農家とを分けて観察すると、後者は一七・一%に当る一〇六萬戸にのぼっている(第160表参照)。残りの八二・九%、五一二萬戸の農家はこのいずれかを使ったわけであるが、この両者を使った農家は四八・四%で全農家の半ば以下である。わが国の農業にあつては全く人力のみによって農業生産をおこなう農家が一七%以上に達し、機械と家畜の両者を使って経営した農家が全農家の半ばに達しないという事実は、農家の経営条件、したがってその生産力がいかなる水準にあるかを端的に示す一つの重要な指標であろう。

なお畜力の種類を見ると、牛が三〇七萬戸、馬が一五九萬戸で牛が圧倒的に多い。また機械力については、電動機、石油発動機を使ったものが大部分で、トラクター、ハンドトラクター、動力耕耘機など本来的な農作業機械を使用したものは少数(約三萬戸)である。しかしこれらは少数ではあるが、農耕過程の本格的な機械化の端緒を示すものとして、その質的な意義は重要である。

三、家畜・家禽の飼養および養蚕 農家の飼養する家畜の内、乳用牛は一九萬頭、役肉用牛は二五二萬頭で、これを四七年の調査に比較すると、乳用牛は三萬頭、役肉用牛三二萬頭とかなりの増加を示している。しかし馬は一〇七萬頭で四八年に比べて四萬頭の減少を来している。めん羊、豚、にわとり等は、四七年にくらべていずれも相当数の増加を示している(第161・162表)。

養蚕農家実戸数は四七萬戸で一九五九年にくらべ戸数はもとより掃立蚕量、収繭高ともに減少している(第163表)。しかし本調査は悉皆調査であり、四九年のそれは表式調査によつたものである

から多少の喰いちがいが生じていることは注意せねばならない(前掲速報六ページの注意を見よ)。

日本労働年鑑 第24集 1952年版

発行 1951年10月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年6月1日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1952年版(第24集)【目次】 次のページ→ ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---